
とある転生者の過負荷（マイナス）

クズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある転生者の過負荷^{マイナス}

【Nコード】

N1468Y

【作者名】

クス

【あらすじ】

一瞬にして死人になった僕。気が付けばそこは死後の世界。そこで僕は、下っ端の死後の世界の管理人みたいなのに会った。ポイントが皆無な僕は天国にも地獄にも行けず、人生をやり直す必要がある。所謂転生だ。下っ端に気に入られた僕は大量チート能力が貰うことが出来るらしい。

・・・くだらねえ

大量チートなんか要らない

そんなの、過負荷一つで十分だよ

悪いことも良いことも、僕がゼーんぶ『無かったこと』にするから

プロローグ（前書き）

悔いはありません

初投稿にして始めてしまいました

駄目文ですが、どうぞ

プロローグ

人生とは唐突にことが起きるんですね。

突然ですが、僕は死にました。え、いきなりすぎる？ それなら僕を木っ端微塵に爆死させた工事用ダイナマイトに文句を言ってください。

アレは普通の日でした。僕はいつも通り日課の朝の散歩に出掛けました。

外も良い天気で、小鳥などが鳴いており、とても平和な日でした。

僕も

機嫌が上々、まさに最高の朝でした。

僕の家付近には新しくビルが建設されることになって、どのような建物になるのかワクワクしていました。

それなのに……

アレは一瞬の出来事でした。

いつも通りビルの前を通ります。それは別になにもおかしくありません。

いつも通りちょっとだけビルを眺めます。それも別になにもおかしくありません。

こんな笑い方、今だにする人が居るんですか？

その笑い声は徐々に大きくなっていき、やがては一人の人物がこちらに近づいてきました。

「ギャハハハハハ！！！！ お前、最高だよ！」

その人物は、ジーンズにTシャツという今時の若い人が着てそうな服装で、髪は真っ赤で血の色のようなようでした。靴は履いておらず、裸足のままです。

「いきなり登場して第一声が”ギャハハハハ”はどうかと思いますよ？」

的確な突っ込み。なのに赤髪あかがみ(仮)さんは大笑いしたままです。

「ハハハハ！！ いやだつて、あんな死に様だと誰でも笑うだろ！ギャハハハハハ！」

死に様？ ああ、あれのことですか。

「ギャハハハ！ ああ、悪い。つい面白くてな・・・ククク。はあ、これ毎回説明すんのも面倒だけど、お前は死人だ」

そんなの明白ですよ。貴方は二次小説などを読んだことがあるんですか？

大抵の場合は死んで真っ白な世界に行く 神様に会うというパターンです。

「そんなの分かってますよ」

「へえ、状況把握が早いな。さては相当な妄想癖があるな？」

「馬鹿なことやってないで、早く僕を天国でも地獄にでも送ってくださいよ」

僕はもう楽になりたいんですよ。さつさと天国でも地獄でも何でもいいから送って欲しいです。

「まあ待って待て。こっちにも”ステップ”ってのがあるんだよ。まずは・・・ククク、死因からだな」

さつきからなんで死因で大爆笑してるんですか？ なんとというか、死に様で笑われると気分が悪くなります。

「お前の死因は・・・ギャハハハハ！！ 工事用爆発物投下による爆死だつてよ！

ギャハハハハハ！！ それって避ける意味がねえじゃねえか！！」

いい加減にしないと怒りますよ？ 僕だつて気は長くありません。

「お前の人生経験を調べさせてもらったけどさ、お前、親父が工事現場で爆発物を取り扱う仕事してんだろ？ それなのに爆弾で死ぬつて・・・気の毒すぎるだろギャハハハハ！！！！」

そこまで笑われるつて・・・

「まあ、話は終わりだ。とつとと天国にでも行きな」

あれ？ それで終わり？ こういう展開って”神のミスでした、転生させます”って展開なんじゃないんですか？

「こういう場合って”神のミスでした。お詫びとして転生させます”って展開なんじゃないんですか？」

「はあ？ なに言ってるのてめえ？ 神がミスするわけねえってことぐらい

下っ端のオレでも分かるわ！ なんでもかんでも神のせいにするんじゃないねえ、

この無神論者が！」

この人は下っ端なんですか・・・想像していたのとかかなり違いますね。

ま、仕方ないですね。さっさと天国で安らかに暮らしましょう。

「ん、ちょっと待て」

すると、赤髪さんはポケットからなにやらノートのような物を取り出しました。

かなり使い込まれてますけど、なにが書いてあるんでしょうか・・・

「プ、ギャハハハハ！！！！」

ノートを見ると再び大笑いを始めました。さつきから笑ってばかりですね。

「お前最高だよ！ うん、実に面白い！」

なにが気に入られたんでしょうか．．．僕はまだ貴方とは初対面ですよ？

「いいか、あの世っつーか死んだ後の世界にはポイントってのがあるんだ」

ポイント？

「ポイント．．．ですか」

「ああ。生まれた時から死ぬ時まで人間は皆ポイントを持って生活してるんだ。

悪いことをすればポイントは無くなるし、逆に良いことをすればポイントは増える。

そして、死んだ後に行く場所がそのポイントによって決まるんだ」

なんとというか、ゲームみたいですね。僕はどれぐらいあるんでしょうか。

「それがお前と来たら．．．ギャハハハハハ！」

いい加減笑い声が鬱陶しくなってきました。何回も聞いていると耳障りです。

「僕のポイントになにかおかしい点でも？」

「いや、まったく無いんだよ。でも、逆にそれが面白いんだよ！
ギャハハハ！」

普通のなにがいけないんでしょうか？ 自惚れているわけでは
ないですけど

僕は人生でなににも悪いことはしてませんよ？

「普通のなにがいけないんですか？」

「いや、だって、お前のポイントは生まれた時から一切変わって
ないんだよ！」

つまり、生まれてから一度も良いことも悪いこともしてねえんだよ
！ それって

ある意味不可能じゃね？ ギャハハハハハ！」

言われてみれば、僕の人生ではあまり良いことも悪いことも起きて
ませんね。

普通に生まれて、普通に生活して、普通に生きていましたからね。

親戚や親が亡くなられたりした時でも泣いた覚えはないですし、
ただ寿命が僕より早く訪れたとしか思いませんでした。それはある
意味

大罪だと思えますけど。

「そしたら僕はどうなるんですか？」

「それが分からねえんだよ・・・これって今まで始めてのことだ
し、

オレも対応の仕方が分かんねえんだよ。ちょっと待ってる、今調べとくから」

すると、赤髪さんはポケットから小さいながらも分厚い本を取り出し、

ペラペラとページを捲り始めました。

「え〜と．．．あつたあつた、”死人の扱い書”」

僕はゲーム機ですか。

「．．．おいおい、マジかよ．．．」

赤髪さんはなにやら驚いた表情になりました。

どうかしたんでしょうか？

「えーと．．．いいか、さっきも言ったと思うがお前のポイントは生まれた時

からまつたく変わってない。つまり0のままなんだ。大抵の奴はポイントが0より

多かった時は天国で、0より低かったら地獄に行くんだ。でもお前はポイントが0

のまま。どちら向きでもないからどちら側にも送れない」

うんうん、つまり？

「つまり．．．お前は1から人生をやり直す必要がある」

．．．はい？

人生を一からやり直す？ なに刑事ドラマの主人公が犯人に言うセリフ
みたいなことを言ってるんですか？

「どういう意味ですか？」

「お前はそのままもう一度生を受けることになる。その年齢のまま、
その状態のまま再び生き返る。所謂転生だ」

へえ、もう一度僕は生きれるんですか。周りにまったく干渉は
なかったのが
この後に及んで役立ちましたね。

「ただ、この場合は幾つか条件がある」
条件？

「取り扱い説明書での条件は三つ。

生き返る世界はランダムに指定される。元々の世界かもしれないし、
過去の世界かもしれないし、まったくの別世界かもしれない。
れない。

生き返った後はなんとんでも寿命で死ななければならぬ。
もし事故や殺人で死んだ場合、お前はそのままずっと生死の狭間を
永久に
さまざることになる。

死んだ後のポイントで今後が決まる。

さつきも話したがお前のポイントは0のままだ。つまり、良く生きれば天国で過ごせるし、悪く生きれば地獄で過ごすことになる。

再び0のままだと？と同じく生死の狭間に突き落とされる。

以上だ。分かったか？」

うーん、中々と厳しい内容ですね。気をつけないと天国か地獄に簡単に傾くような点数ですしね。

「分かりました」

「そしてだ、これは久しぶりに爆笑させてくれたお前への礼だ。よくある大量チートってのをやるよ。何個でもいいから好きに選べ」

ああ、あのテンプレートの展開ね

うん、でも僕の考えはもう纏まっているよ

「そんなのいらないよ」

「は？」

「僕に大量チートなんてそんな面倒なものは要らない。いや、”必要ない”と言った方が正しいかな」

「必要ないだア？ てめえ、おれ本気で言ってるのか？」

お前も健康な高校生男子なら大量チートぐれエ欲しいだろ？」

ううん、全然

僕が欲しいのは”アノ”能力一つだけだよ

「僕が欲しいのはとある一つの能力だ」

「ほオ、それはなんだ、言ってみろ」

間を入れて、僕は笑顔で能力名を言う

「オールフイクション大嘘憑き。それがその過負荷マイナスの名前だ」

「おーるふいくしょん？」

なんだ、知らないのか？

週間少年ジャンプの愛読者なら多分有名なチート能力なのに

「オールフイクション大嘘憑きの能力は、すべて現実を虚構にする^{なかつたこと}。人類史上最低の過負荷マイナスです」

「現実を虚構にする？ おいおい、どんなチート能力だよそれ？
大量チートは要らねえって言った癖によオ。それに、さつきから言
つてる

過負荷マイナスってなんだよ？ 聞いたこともねえぞ」

「過負荷っていうのは、人間が稀に生まれながらに持っている才能のつらみ
の呼び名です。自分にとって利益プラスになるのが異常、自分にとって不
利益マイナス
になるのが過負荷マイナスと呼ばれています」

僕が過負荷について説明すると、赤髪さんは「なるほど」と手を叩いて頷く

「そして、過負荷を持った人間は生まれながらの敗者で、不幸にしかなれないような人類の屑です。僕にピッタリでしょう？」

過負荷は一見便利そうに見えて実はそうでもない

一度でも過負荷になれば一生幸せになれない、無才能で負けることしか出来ないような人間になってしまっんだ

ま、僕にはそんなの関係ないけどね

「・・・ギャハハハハ！！ 最高だよ！ お前、本当に面白いえ！

まさか自分の貰う能力が自分を不利にする能力なんて、傑作だ！ うん、気に入ったぜお前！ 分かった、お前にその大嘘憑きとやらをやるよ」

赤髪さんは僕の胸の辺りに手を置いて、目を閉じなにかを唱え始めた

すると、体の中に突然なにかが送り込まれるような感触に陥る

その感触が終わると、僕は自分に騒然とした

自己憎悪、劣等感、世界のくだらなさ

自分は最低だ、無才能だ、負完全だ

これが大嘘憑マインナスきの力、なのか・・・

「終わりだ。ついでに一つだけ能力を追加させてもらったぜ。なあに、くだらねえチート能力じゃねえよ。その能力の元々の所持者が使っていた能力だ」

大嘘憑きの元々の所持者が使っていた能力？

それってもしかして・・・

「『ブックメーカー
却本作り』」

「お？ 知ってるのか？」

知ってるものにも、それこそ

大嘘憑き以上に最低の過負荷じゃないか

「『ありがとう赤髪さん』『これで僕は負完全かんぜんになれた』」

「喋り方が違わくないか？」

過負荷というか却本作りの所為だよ

あの過負荷の効果を受けている人は皆こんな喋り方と思うよ？

「そついえばお前、名前はどつするんだ？」

名前、か・・・

話に夢中になり過ぎて考えてなかったな

「『前世と同じじゃ駄目なんですか？』」

「悪いがそりゃ駄目だ。他を選びな」

でも、過負荷として生きるのなら、
それに相応しい名前が必要だ

しかも、『大嘘憑き』と『却本作り』を持っているんだ

となると名乗る名前は一つしかないだろう

「『球磨川』」

「ん？」

「『球磨川』くまがわ『そう名乗るよ』」

「オツケー。じゃあ名前は？」

流石に同姓同名は嫌だな

だって、それだと『僕』という過負荷こしんじゃなくなるだろう？

”球磨川禊”に取り込まれて”僕”という存在が無くってしまう

「『うーん．．．』じゃあ雪ゆきで『流石に同姓同名は嫌だから、
限りなく近い名前を選ばせて貰ったよ』」

「球磨川雪ねえ。くまがわ　そとせき うん、良いんじゃないの？」

決定、だね

「『ところで何時転生するんだい？』」

「今だ」

すると、赤髪さんは間を入れることなく僕を蹴りました。

いきなり不意を突かれたので必然的に僕の体は倒れる。

でも、地面に落ちるはずの背中が突然浮遊感を感じました。

下を見ると、そこには大きな穴。中は暗闇しか広がっていません。

「『せめて合図ぐらいくださいよ．．．』」

ちよつとした愚痴を零し、穴の中へと落ちていく。

「頑張れよー！ー！！」

最後に赤髪さんの声援が聞こえました。

さて、僕は一体どこの世界に送られるんでしょうか．．．出来れば元の世界がいいんですけど、そう都合良く事は運びませんね。

ああ、ノンビリとした世界に行きたい．．．

まあ、どんな世界でも良いけどね

どんなことが起きても、僕がゼーんぶ『無かったこと』にするから

プロローグ（後書き）

とても長いプロローグでした

過負荷が好きで始めた小説です

どうぞよろしくお願いします

一話 『んじゃ』 『また明日とか!』 (前書き)

駄・目・文

自分の駄目文さに本当に呆れます

ああ、誰か文才を分けてください

初めて感想をくださった方、評価してくださった方々、
ありがとうございます

「話 『んじゃ』 『また明日とか!』」

気が付けば僕は、遙か上空へ聳える建物の裏に倒れていた

体中に鈍い痛みが走っていて、頭痛も少々ある

僕は…生まれ変わったのか…

あまり実感が湧かないな

でも、事実僕は死んで、再び生き返った

こんな週間少年ジャンプに出てきそうな展開、
実際にあるんだね

「『痛たたた…ここは何処だろう?』」

死から開放感から思わず独り言を呟いてしまう

さて、僕の新しく来た世界はどうなんだろう

立ち上がり、辺りを見回してみる

幾つも聳える高層ビルと、隅で道を掃除するロボットのようなもの

そして、僕の世界では見当たらなかった電車などが幾つか見える

この世界はどうかやら僕の元の世界と似ているらしい

少々技術だけ進んでいるみたいけど

「おーい、その君！」

路地裏から観察していると、建物の影から突然声を掛けられた

そちらの方向を向いていると、一人の学生らしき少年が居た

学生服を着ていて、腕には緑色の腕章をしている

誰だろう？

「っん？ 僕？」

「ッ…！」

僕もそう少年に言うと、あの子は一瞬怯えたように見えた。

その表情は恐怖から軽蔑と憎しみの目に瞬く間に変わった

僕が他人と会話するだけで恐れられ、嫌われる…か

これが過負荷の欠点みじやくなのか…

「この辺りで大きなエネルギー反応があったと

通報があったんだけど…君はなにか知っているのか？」

丁寧な口調でも表情はかなり警戒している

大きなエネルギー反応ねえ…

完全に僕じゃないか

「『うーん…』 『知らない』 『少なくとも僕は無関係だね』」

「とりあえず一緒に来てもらっていいか？ 見かけない顔だし、少し話を聞かせてくれないかな…！」

そうやって作り笑いで僕に手を差し伸べてくれる

でも、その笑顔の裏には威圧的な瞳が宿っている

僕を完全に警戒し、軽蔑し、見下すような目だ

これからは過負荷として、いつもこんな目に耐えないといけないのか…

「『うん、いいよ』 『でもさあ、僕、少し探し物をしているんだ』」

『よかつたら君も一緒に探してください』」

そう言っつて路地裏の奥に手招きする

友好的な笑顔を作っつて、できる限りフレンドリーに言っつ

「…分かつた。見付かつたら直ぐ着いてきてもらいますよ？」

それに応じると、少年は僕が居る路地裏の奥に来てくれる

そして、少年が目の前まで迫つた時…

「がアツ!!??」

少年の腹に数本の巨大な螺子が刺さり、
更に両腕にも小さな螺子が幾つも突き刺され、
壁に縫い付けられていた

「『あは!』』迂闊だねえ学生くん、過負荷^{マイナス}相手に
無計画に近づくなんて』』でも安心して、僕は殺したりはしないか
ら』」

「てめえ…!!」

何本も螺子が突き刺さっているのにも関わらず、少年は僕を睨み倒
している

「『良いのかなあ』そんな態度をとって?』』君の命はもう僕の手
の平の中っていつのに』」

すると、今度はさっきより数倍大きい螺子を取り出して、少年の頭
に近付ける

その行動に睨んでいた少年は涙目になる

「お願いだ! 命だけは助けてくれ!」

「『そんなテンプレ的な誤り方をされてもなあ…』』もう少し才
リジナリティのある

謝り方をしてくれないと、僕も助ける気が失せるなあ…』」

「頼む！ なんでもするから！」

慈悲を悲願してくる少年

そんな少年を、僕はただただ笑いながら見ている

なんだろう、この感じ？

他人の悲痛の表情を見ると、不思議と満足した気分になる…

人を不幸にすることで、僕は満足できる

そうだ… そうなんだよ

過負荷はいつも迫害される、ならどうすれば
他人に平等に接してもらえる？

他人を自分と同じ位置に墮おとせばいいんだ

「『ホント？』 『なんでもしてくれるの？』」

そう訊くと、少年はブンブンと頷いた

「『うーん、どうしよう？』 『他人に命令できる機会なんて滅多に無いからなあ』」

『あ、そうだ！』 『うん、なにを頼むか分かったよ！』

『死んでくれない?』」

そう言つて、僕はその螺子を少年の眉間に
ぶっ刺した

絶望の表情に染まつた少年はそのまま、
氣力を無くしたかのように
喚くのをやめ、目を閉じた

「『…なんちゃって!』』よく漫画でこつ
こつという台詞があつたか
ら、僕も

一辺言つてみたかつたんだあ!』」

そう言つと、僕は一つずつ少年の螺子を抜き取る

全部抜き終わると、僕は意識の無い少年に向かつてこつこつ言つた

「『だいじょーぶ、君のその傷は』』
全…無…か…つ…た…こ…と…に…し…て…あ…げ…
たから』」

返り血塗れになつた顔で僕は、満面の笑顔でそう言つた

~~~~~

風紀委員第177支部は、大騒ぎしていた

先ほど見回りに向かった同僚の一人が、

路地裏で気を失っていたのだから当然とも言えるが

一部の者は同僚を襲った犯人の行方を追い、  
その他一部の者は精神錯乱状態に陥っていた  
同僚を、静めようと沸騰している

まるで臨死体験から抜け出した恐怖のような  
錯乱状態に陥っており、その惨状は凄まじかった

「一体誰がこんなことを…」

錯乱する同僚を見てそう呟くのは、

第177支部所属の初春飾利

圧倒的なコンピューター技術を持っており、

そのハッキング技術は風紀委員でも重宝されている

あまりにも様子のおかしい同僚を他所に、

初春は気分を変えようと路地裏から出た

そこで目に飛び込んできたのは、路地裏の出口の直ぐ後ろ、  
つまり自分の真横に居る少年

その少年の顔を見て初春は戦慄していた

少年の顔は、まさに返り血塗れだった

「『ん？』『あ、やべ！』」

初春を見るや否や、その少年は逃げるように走り出した

「あ！ 待ってください！」

慌てて初春はその後を追いかける

普段は身体能力が低く、逃げる犯人を捕まえることなど到底できない初春だが、なぜかこの少年にはどンドン追いついていった

そして、ようやくその少年の肩を掴んで捕まえた

「『ハアツ』ハアツ』ハアツ』』『やっぱ人類最低の僕が  
他人から走って逃げ切るなんて無理があつたかあ…』」

声を発した途端、初春はかつてにない気持ちに襲われた

ただ声を発しただけ

それだけで、この少年に対して説明しようのない憎しみを抱いた

「この人は気持ち悪い」と心の中で思いながらも、その少年に声を掛けた

「あの、貴方は誰ですか？ どうして逃げるんですか？」

「『だって、僕って証明書とか学生書とかまったく無いんだよ』  
『見たところ君達って警察みたいな連中だろ?』 『それなら捕まり  
たくない  
から逃げるのが普通だろ?』」

予想外のことを発した

証明書などが無い場合

つまりそれは不法にこの学園都市に侵入したという意味

学園都市の周りには巨大な壁が張り巡らされていて、  
進入する方法などは殆どなかった

「『あ、やべ』 『僕としたことが、返り血を拭いていないじゃな  
いか』

『あはは、いけないいけない』 『服は洗ったつもりなんだけどなあ  
…』」

自分の顔の惨状に気付き、乾いた笑い声を出しながら、  
少年は自分の顔を袖で拭いていた

あまりに堂々と証拠を隠滅しようとする少年に、初春はただ呆れる  
ばかりだった

「あの、一緒に着いてきてもらえませんか?」

「『嫌だ』 『だって今日、ジャンプの発売日じゃん?』

『僕はこの日のために一週間を生き抜くんだよ』」

「そ、そんなのは後にしてくださいよ！」

馬鹿馬鹿しい理由に怒鳴るが、  
それでも少年は笑みを崩さない

「貴方の名前は？」

「『球磨川雪』 最近ここに来た高校生さ」

「では球磨川さん、一緒に着いてきてください。  
証明書や不法侵入の件では、そちらで訊きますので」

言われるがままに連行される球磨川

元々過負荷の所為なのか、身体能力が  
女子中学生のはずの初春より低いため、  
抵抗せず素直に着いていった

いやいや、ミスったぜ

興味本位での学生くんを放置した場所に行ったけど、

まさか警官で溢れ返っていたなんて

しかも、あの学生くんもまさか警官の一人だったとは…  
ついてないぜ

今回は他の警官も多いから、僕は素直に連行された

本当は螺子伏せた後で逃走したいんだけどなあ

「『君も警官なのか？』」

「いえ、私は風紀委員という組織に所属しています。まあ、  
所謂学生で構成されている警察です」

「『へえ。ちなみにあの倒れていた学生くんも…』」

「風紀委員のメンバーです」

あはは、やっぱりそうか

結局こうなってしまうのか…

「ではさっそく、貴方について話してもらえますか？」

風紀委員第177支部つて所の一室に連れて行かれた僕は、  
そのまま事情聴取という名の尋問を受けた

「『さつきも言ったけど僕は球磨川雪』『ついさつきここに来たばかりの

高校生さ』『よろしく!』」

「私は初春飾利といいます。さつきですが球磨川さん、貴方はどうやってここに来たんですか？」

初めて自己紹介してくれた初春ちゃん

うーん、見るからに年下の女の子に尋問されるのは少し嫌だけど、しょうがないねこは

「『知らない』『気が付いたらあの路地裏に倒れていたんだ』」

「どうやってここに来たか知らないんですか？（記憶喪失?）」

まあ、神様に送り込まれたなんて言えないし

「『うん』『だから僕はここが何処なのか、ここでの文化や常識はなんなのか、さつぱり分からないんだよ』  
『説明してくれば僕は助かるんだけど…』」

「そうですか…此処は”学園都市”と呼ばれている科学の街です。ここでは科学的に解明された超能力を研究していて、ここに住んでいる殆どの人間は学生です」

おいおい、まるで少年漫画のような世界じゃないか

それに、学園都市か…どこかで聞いたことがありそうなんだよねえ…

僕はジャンプ愛読者だから他ではあまり覚えが無いけど

「『へえ、それはまた僕の少年心を撥るような場所だね』」

「でも、本来ここは正式な手続きをしないと入れないんですけど…」

まあ、僕はその赤髪さんに落とされてきたからね

正式な手続きなんて一切働いていない

「『そういうのは何処でやるのかな？』 『悪いけど、そうと分かれば僕は

一刻も早く手続きを済ませてさっさと平和に戻りたいんだけどなあ』

」

その方が面倒なことにはならなさそうだしね

新しい世界に来た初日で不法侵入者で指名手配されたらそれこそ  
過負荷マイナス以上に最低マイナスだよ

「あ、でも…（この人って一応不法侵入者だよな？）」

「『まあまあ、そういう堅いこと言わないでよ』 『そういう人は  
友達が減るぜ？』」

「よ、余計なお世話ですよ！」

僕なりの忠告のつもりだったんだけどなあ

「手続きはここで済ませてください。（記憶喪失なら良い、かな？）

「 そう言っつて、 なにか住所を紙に書くと、 僕に渡してくれた

「 『ん』 『ありがとう』 」

うん、 じゃあさっそく

「 『じゃあ、 さようなら』 」

この部屋から出ようとする

「 あ、 待ってください！ まだ話は終わっていませんよ！」

でも直ぐに扉の前までダッシュされ、 出口を塞がれる

あはは、 幾ら過負荷とはいえ、 女子中学生に

出口を塞がれて出れないなんて、 滑稽な話だぜ

本来ならここで彼女を螺子伏せてでも突破するけど、  
今日の僕は気分が良いんだ。 ここは見逃してあげよう

「 『ええ…』 『僕は早く週間少年ジャンプを買に行きたいんだけど』 」

「 手続きを済ませるっつて言いませんでしたっけ!？」

あ、 それもついでにやっておくよ

「 はあ…もういいです。 貴方は悪気があった

わけでも無いと思いますし、もう帰っても良いです」

あは、とうとうそっちが折れたね

面倒臭かったけど、まあこれで不法侵入者で無くなるのなら、それで良いけどね

「『うん、ありがとう』『じゃあね』」

そうやって僕は扉に手を掛ける

あ、そういえば彼女に言っておかないといけないね

「『君、忘れてると思うから言っておくね?』」

「え、なんですか?」

「『君の同僚を螺子伏せたのって、僕だぜ?』」

そう言った途端に、彼女は動きを止めた

啞然と戦慄した表情のまま僕を見つめている

その惨状に、僕は笑みを浮かべながら背を向ける

「んじゃ  
『また明日とか!』」

一話 『んじゃ』 『また明日とか!』 (後書き)

駄・目・文

大事なことなので前書きと後書きで合わせて二回書きます

主人公を原作に組み込ませるのがここまで難しいとは思いませんでした

それに、初っ端から思いつきり暴れちゃっていますし

それでも基礎の身体能力は殆ど球磨川本人と変わりません。  
却本作りも加わった所為で、その身体能力は女子中学生をも  
下回っています(笑)

はあ、もっと文才が欲しい…

二話 『僕は被害者だ』 (前書き)

今回は少し短いです

二話 『僕は被害者だ』

風紀委員の支部から離れて数時間が経っていた

今は適当に学園都市を散歩しているんだけど、  
その暇な時間で僕は考えたんだよ

この世界は少なからずとも元の世界とはかなり違う

超能力なんて技術があるんだ、幾ら”科学の街”って  
言われていてもこれはかなり非科学的だ

でも、そこで僕はあることを思いついたんだ

僕はもしかしたら、一人じゃないと思う

この世界は少なくとも僕の世界とは違う。  
超常的なことは起こりえるし、非科学的なこともある

それなら、つまり、僕以外の他の過負荷も存在するかもしれないんだ

幾ら世界は違っててもこの世界のくだらなさは変わらない

理不尽さも何も変わらない

そんな腐った世界なら、僕以外にも過負荷として  
生まれてきている人が居るのかもしれない

だから僕はもう、この世界でやることは決まった

僕は、この学園都市に住む過負荷を全員纏め上げてみせる

そして、超能力者のエリート共に思い知らせてやるっぜ

人類<sup>マイナス</sup>最低の素晴らしさというものを

数分後

どうしよっかなあ

幾つものビルが並び、大勢の人で賑わっており、  
ショッピングモールや飲食店なども多数並んでいる  
場所を、僕は一人で歩いている

数多くの建物から発せられている電気などの光の  
所為で、夜とは思えないほど明るく、活発だった

そんな賑やかな道を僕は歩いているんだけど…

金、無いよ

元々僕はこの世界に来た時はなにもなかった

携帯は勿論、お金やパスポート、証明書なんて皆無だ

服装は神様がこの学生の街でも違和感が無いよう、学ランになっていた。赤髪さんなりの優しさかな？

はあ、これじゃあ週間少年ジャンプすら買えないじゃないか

何気に周りを見てみると、僕は面白いものを見つけた

大勢の不良っぽい高校生が、恐らくは中学生の一人の女の子を囲んでいる

どこから見てもカツアゲか、ナンパだね

今時そんなことする連中が居るなんて、ちよつと時代遅れとは思わないのかな？

…あ

あはは、いいことを思いついたよ

ここが漫画の世界だったら、多分”ニヤ”って効果音が出たと思うよ

「『やっほー！』『皆さん、こんばんは！』」

お気楽的に、友好的に不良たちに挨拶した

突然声を掛けられたのに驚いているけど、あの女の子を含めて全員の視線が僕に移る

「ああ？ 誰だてめえ？」

「『ただの通りすがりの高校生さ』 それより、僕  
『君達に訊きたいことがあるんだけど、言っつていいかな？』」

一人の不良が僕を脅すかの様に睨んでくる

それにも特に同様することなく、  
僕は話を続ける

「『女子中学生をナンパするってことは  
つまりさあ、君達全員ロリコンって意味？（笑）』」

僕の発言に周りの空気が凍ったかのように静かになった

不良たちは微動だにせず、僕を見つめている

やがて、硬直が段々と解けていき、その表情は怒りに染まっていく

「てめえ！ ふざけるんじゃないよ！」

全員が僕に殴りかかってくる

あまりのそれなりに大人数だけど、特に問題は無いね

「あ、危ない！」

さっきまでずっと突っ立っていた女の子が  
心配したような声を上げる

あはは、まあ見るからに貧弱そうな草食系の僕が  
ガラの悪そうな不良に大勢で襲われたらそう思うよね

次の瞬間、不良たちの全員が一人残らず、  
幾つもの巨大な螺子で地面に螺子伏せられていた

「なッ！？ グ、ぎゃああー！！」

体中が螺子で貫かれている惨状を見て、  
不良の男の子たちは全員痛みで声を上げる

「『あは！』 『馬鹿だねえ』 『人の危険度を測らず攻撃してくる  
のは  
とても浅はかなことだぜ？』 『それに、君達から攻撃してきたんだ  
から  
正当防衛ってことになれるしね』」

ついでに僕は全員のポケットから財布を抜き取った

「『じゃあ、あばよ』」

そして、用済みになった地面に平伏している男の子たち  
全員の後頭部に、巨大な螺子が突き刺さった

「『ぎゃああああ！！！』」

一声を上げた後、辺りはシーンと静かになった

完全に計画通りじゃないか

過負荷だから自分の思い通りには行かないとは思ったけど、まさかこんなにスムーズに進むなんてね

服は返り血塗れになっちゃったけど、まあ

これは大嘘憑きで直せるけど

お金も手に入ったし、一件落着（？）

「『って、ワオ』」

某風紀委員長みたいな声を上げると、

僕の顔面の前をギリギリ雷撃が通り過ぎた

雷撃が向かってきた箇所を見ると、僕に

向かって手を突き刺しているさっきの女の子が立っていた

「アンタ…！」

敵意丸出しで僕を睨んでくる

それより雷撃ってなんだよ？

まるつきり漫画みたいな能力じゃないか

これが超能力なんだね

これは凄い、僕の少年心をここまで攪るなんて

「『おいおい、なにをそんなに睨んでいるんだい？』」

「幾ら私が脅されてたとしても、これはやり過ぎよ！」

地面で血塗れになりながら体中を螺子で串刺しにされている不良たちを指差す

なんでこうなるんだよ…

「『あの人たちが攻撃してきた』 故に正当防衛さ』」

「自分から挑発しといて、何処が正当防衛よ！ お金だつてあいつらから盗んでるし！」

はあ、せつかく気分が良いからついでに助けてあげたのに、この仕打ちはなんだよ？

やっぱり過負荷に対しては理不尽だなあ

「『』でも、事実あの子たちは僕に向かって攻撃してきただろ？』」

『貴方は僕に黙って殴られてボコボコにされるとでも言っているのか？』」

「別に、私はそんなつもりで…」

「『僕は大量の高校生たちに袋叩きにされる所だったんだぜ？』  
『それなのに僕を凶悪犯扱いするなんて、横暴だよ君は』」

『僕は被害者だ』」

「ッ〜！」

声にもならない怒りの声を上げる中学生ちゃん

それは僕が行った行為に対しての怒りなのか、  
僕に論破されたからの怒りなのかは定かでは無いけど

「ふ、ざけるなア！」

再び電撃をぶっ放してくる中学生ちゃん

いきなりスイッチの入った全力の攻撃で、  
しかも僕を殺す気満々だ

過負荷の貧弱体質である僕にこんな攻撃は避けれるはずも無く…

「『う、うわアア！！』」

僕は思いつきりその電撃を喰らい、  
真っ黒焦げにされた上に血塗れになってしまった

あはは、やばい、マジで死んじゃうよ

「えッ！？」

避けると思っていたのか、驚いている中学生ちゃん

「『あはは、過負荷相手に手加減無しって、えげつ無いぜ…』」  
痛みと傷、そして出血多量で倒れてしまう僕

「あ、ちょっと！」

でも…

「なッ！？」

中学生ちゃんの頭上から大量の螺子が  
降り注ぎ、当たるか当たらないかのぐらいの  
距離で周りに突き刺さる

「『ふう〜、危うく痛みで気を失っちゃう所だったよ』」  
『流石に無意識での使用は出来ないし』」

無傷で僕が立ち上がるのを見て、中学生ちゃんは目を見開いた

「そんな！？（幾ら手加減していても、レベル5の電撃を直撃して無傷なんて…それにこいつからあふれ出てる負のオーラ…）」

「『はあ、これじゃあ僕が益々被害者じゃないか』 『ま、その方が警察にも言い訳できるし、良いか』」

「アンタ、何者？ どうして私の電撃を受けて無傷なのよ？」

「『そんなの簡単さ』 『君が頑張って僕に放った電撃を』

『君が自分の労力を使って僕を丸焦げにしたっていう事実を』

『無かつたことしただけさ』

「は？（無かつたこと？ わけ分からないわよ！）」

僕の無能力マイナスの意味が理解できていないようだね

まあ、君みたいな能力者プラスが僕みたいな無能力者マイナスを

理解するなんて絶対にありえないけど

すると、後ろからパトカーのサイレンが鳴り響いている

どうやら僕が不良たちを螺子伏せているのを見て

誰かが通報したみたいだ

「『あは！』 『僕もう行かなくちゃいけないよ』

『じゃあまたね、中学生ちゃん』」

お別れの挨拶をした後、啞然としている中学生ちゃんを他所に僕は歩き出した

「アンタは、絶対私が捕まえる！ 捕まえて、半殺しにしてあげるから、覚悟しろ！」

歩き出す僕に向かってそう怒声を放つ

あはは、実に強者の<sup>ブラス</sup>ような台詞だね

でも、なんで僕ばかり恨まれるんだろう？

あはは！ 憎まれっ<sup>マイナス</sup>子だから仕方無いよね！

三話 『僕と居れば、君は世界一不幸になれる』 (前書き)

一人目のオリキャラ兼オリ過負荷です

もし良かったら過負荷のアイデアなど

あれば感想欄に書いていただけると嬉しいです

一種の募集ですね

僕の想像力ではあまり良い案が浮かばないので、  
良かったらどうぞ書いてください

出来る限り採用することにします

三話 『僕と居れば、君は世界一不幸になれる』

「『これください』」

「は、はい！ 625円になります！」

千円札をコンビニの店員に渡し、僕は会計を済ませる

そして、小さな袋を受け取り、そのままコンビニを出る

なにをしてるかって？ あはは、愚問だね

お金がやっと手に入ったんだからジャンプは直ぐにでも買わないといけないだろ？

ついでに食べ物も少し買ったし

あの中学生ちゃんとの小さな言い争いから

一時間ぐらい経ってるけど、まったく…することが無いぜ

まず住居すら無いんだ

ま、それは正式に登録したら学校と共に

与えられると思うけど、今は行く場所すら無い

それに他の過負荷に関しての情報もまったく無い

こんな学生みたいなお子様で溢れている都市なら

過負荷みたいな噂も多いと思っただけど、意外と少ないらしい

訊き込みをしても僕が話しかけると皆逃げちゃうし

はあ、確かに大嘘憑きのお陰で死ねない体になっだし、赤髪さんから与えられた課題は問題無いけど、過負荷がここまで不憫だとはね

あの漫画を読んだ人は殆ど、”過負荷とか異常性マイナスが欲しいなあ”とか思うかもしれないけど、過負荷や異常性なんてとんでもなく不憫だよ

その他の人と比べるとかなりの異常性な分、避けられ迫害され、化け物を見るみたいな目で見られる

そんなの、常人じゃ耐えられないよ

だから過負荷や異常性を持っている人は少なからず性格や考え、理想が破損しているんだ

とまあ話を戻すけど、とにかく僕は訊き込みでも相手にされないんだ  
途方に暮れながら僕は深夜の道を歩く

すると、近くを歩いている二人組の興味深い会話が耳に入ってくる

《ねえねえあの噂聞いた？》

《あの噂ってなに？》

《ここの直ぐ近くにある廃墟に人が住んでるって噂があるんだけど、その人に近づいた人は皆不運な死に遭ったんだって!》

《うわあ! こわ〜!》

現代の女子ではもう定番の都市伝説のような噂話

でも、これはひょっとして…

「『ねえねえその二人』 『ちよっと話を聞かせて貰ってもいいかな?』」

僕が話し掛けると、二人共ビクつと一瞬震えた

僕ってそんなに気持ち悪いのかな?

それともこの過負荷か、この括弧つけた話し方の所為かな?

「ひッ! えつと、なにか用かな…?」

少し震えた声で答えてくれる片割れちゃん

「『さつき話してた都市伝説の話なんだけどさ』 『その廃墟って何処かな?』」

あの噂を聞けば、その廃墟に住んでる人って限りなく過負荷かソレに近い無能力（無能力）を持っている人だ

少なくとも過負荷側（過負荷側）の人間だ

それなら勧誘するのも悪くないだろ？

「あ、あつちです！」

近くにある廃棄された工場を指差して言ってくれた

見るからに”近寄るな”って異様な雰囲気を出している

あの場所は、普通の人なら確実に心霊スポットって呼んでいると思う

あはは、まあヒッキーには丁度良い隠れ家だね

「『ありがとう』『急に話し掛けて悪かったね』」

それだけ言い残して、僕はあの廃墟に歩き出す

この世界に来て一人目の僕と同類の奴

どんな最低マイナスか楽しみだよ

ちなみに後ろでヒソヒソと「あの人気持ち悪かったよね？」って話し声が聞えたのは無視しておくよ

さて、廃墟に入ってみたのは良いけど、真っ暗でなにも見えないなあ  
せめて月でもいいからなにか明かりがあればなあ

「『おい！』ここに居るのは分かってるからさあ、出てきな  
よ！』」

『安心して〜！』僕は君の味方だからさあ！』」

試しに大声を出して所在を確認してみる

でも、それは空っぽの工場に響くだけでなにも応答は無い

留守かなあ？

すると突然、僕の後頭部に鋭い衝撃が走った

「『えっ？』」

地面に血が飛び散っていることから、僕は  
後頭部からかなり出血しているみたいだ

殴られるだけで血が飛び散るって、釘バットかなにかか？

「てめえ、なにもんだ？」

後ろからどこか野蛮な男の子の声が聞える

まあ殴られてるから当たり前だけど、どうやら留守じゃないらしい

「『痛ててて…急に殴るなんて酷いじゃないか』」

「勝手に人ん家上がり込むてめえの方がひでえと思うが？」

まったく…元気な子だなあ

この子が”近づくと不幸な死を遂げてしまう”と噂されてる男の子が少し乱暴な箇所以外は至って普通なんじゃないのかな？

「あ、それと、そこに居ると危ねえぞ？」

「『？』『』どういう意味か 『』」

次の瞬間、僕の目の前が鉄棒で埋め尽くされていた

頭は勿論、体中にかなり重い鉄棒や工場の器具が落ちてきて、多分全身の骨が骨折してると思う

後頭部どころか頭全体が流血状態だけど…

「ああ、運悪くその器具を留めてる縄が切れちまったみてえだな。ソイツは不運だな」

「『僕が丁度落ちてくる箇所に立っていたのも不運だったって言うのかい？』」

瓦礫の中から這いずり出ながら僕はその男の子に訊く

「おッ、物分りが良いじゃねえか」

這いずり出て、どうにか立ち上がった瞬間、今度は顔をさつき感じた鋭い衝撃が直撃する

ポロポロだった僕の体は更に吹き飛ばされ、壁に激突する

激突した衝撃で壁に取り付けられていた

古い棚が壊れてしまい、上に置いてあった器具も全て落ちてくる

その真下に居るのは僕

つまり

「『…まったく…痛く過ぎて笑うことすら出来ないじゃないか』」

ドライバーやカッターナイフが体中に突き刺さっている

痛い

これまでに感じたことに無い痛みだ

激痛で意識が無くなりそうなくらいだぜ

でも、この過負荷を手に入れてから

不思議と痛みに耐性ができているんだよ

打たれ強いつて意味かな？

「まだ死んでねえのかよ。いい加減にしてくれよ……」

呆れたように頭を掻きながら僕にスタスタと歩いてくる男の子

僕の目の前まで来ると、胸ぐらを掴みあげて  
目線の位置まで無理矢理持つてくる

「『殺すのかい?』」

「あたりめえだろ。それこそ俺の生き甲斐なんだから」  
ポケットから彼はなにかを取り出した

暗闇の中で輝くそれは、鋭く尖っている  
”凶器”。真夜中の工場に僅かに漏れている月光  
によって露になる男の子の”狂気”

「じゃあな」

そのナイフを、僕の胸に、突き刺した

心臓を貫かれた僕は、力を無くし地面に倒れる

「はあ、まったく手間かけさせやがって」

意識の途切れる少し前に、彼がナイフを  
僕の胸から引き抜き、この場を去っていくのが見えた

「ちッ、また死体の処理かよ。面倒臭えな…  
つかアイツなにもんだったんだよ? あの喋り方と

独特な雰囲気、まるで俺と同じみたいな…」

「『同じさ』」

「なッ!？」

男の子の周りに無数の螺子が突き刺さる

勿論、一本も当ててないけど

「『君は僕と同じだ』 『同じ最低で、最悪で、負完全で、屑で、負け犬で、社会の塵で、不幸せ者さ』」

「てめえ…なんで…!」

無傷で彼の前に立っている僕に驚愕の声を上げる男の子

まあ、さっき殺した相手が目の前に立っていたら誰でも驚くよね？

「『おいおい、なにをそんなに驚いているんだい?』」

『君も同類なら分かるだろ、僕がなにをしたかぐらい』」

「意味が分からねえよ! てめえはなにをした! 何で生きてやがるんだ! てめえは俺が確実に殺したはずだ!」

曖昧に話を済ませている僕にイライラしたのか、怒りの声を上げる男の子

「『簡単々』」

『君が僕を切り刻んだり』

『殴ったり』

『ボコボコにしたり』

『刺しまくったり』

『潰したり』

『殺したりしたことを』

『無かつたこと<sup>……</sup>に<sup>……</sup>ただけさ』

「なんだと……？」

代表的な驚き方をしてるね

何回も言うけど僕はテンプレが大嫌いなんだ

オリジナリティのもの以外は興味が殆ど無い

「『君の能力と同じ種類のものさ』 『僕が見る限り君は他人の運を最低にする能力みたいだね』 『うん、それは十分に最低で最悪な能力だよ』 『気に入った』」

「てめえ、なんで俺の能力を……」

どうやら当たりのようだね

器具が落ちてきたり、棚が壊れたり、  
工具が僕に刺さったのも、ナイフが都合よく急所に  
当たったのも、全てこの子の過負荷が僕の運を  
低下させていたからなんだ

”運が悪かった”、まさにその通りだね

他人の運を最低まで低下させていたんだから

「でも、僕の無能力は君以上に最低だ」  
マイナス

そのまま一本の螺子を男の子の腹に突き刺した

「がアアツツ!!」

反撃されるなんて想定外なのか、避けれず  
痛みの声を上げる男の子

「ためエエエ!! ぶっ殺してやらアア!!」

そう雄叫びを上げているけど、痛くて  
動けないのか地面に寝たままだ

「あはは」別にそんなに怒らなくてもいいよ  
『そんな傷は、僕がぜんぶ無かったことにしてあげるから』

僕は彼から螺子を抜き取った

すると、さっきまでの傷が嘘だったかのように  
綺麗さっぱり無くなっていた

痛みも無くなっている点も含め、男の子はただ啞然とするばかりだった

「そんな…馬鹿な…」

「『あはは、驚いた？』『君の能力が運を最低にするのなら』」

『すべて現実を虚構にする』、それが僕のオウルフイクション大嘘憑きだ』」

あまりにも驚愕な僕の能力の全貌に、彼はただ啞然とするばかりだった

ちなみに却ブックメーカー本作りは使っていないよ？

この過負荷は禁じ手だ、あまり迂闊に使うような代物じゃない

「『まあでも、僕は別に君と戦うためにここに来たわけじゃないんだけど』」

「あア？ 俺になにか用か？」

「『単刀直入に訊くけど、僕の仲間にならないか？』」

「はア？」

僕の質問に疑問符を浮かべる男の子

今までの戦闘で僕は確信した、この子は過負荷だって

過負荷なら、仲間になろうなんて言われるのは初めてだと思っけど

「なに言っただてめえ？　なんで俺が

お前の仲間になんなくちゃいけねえんだよ？」

「『君は恨んでいないのか、君をこんな場所に住まさせるこの世界に？』」

「ッ…！」

僕の言葉に彼は息を詰まらせた

「『君はなににも悪いことはしていないんだろ？』』それなのに君はこんな廃墟みたいな場所に住まさせられていて、都市伝説扱いされている』」

『そんな世界を、君は恨まないのか？』」

「……………」

とうとう無言になってしまった

自分を今までずっと恐れ、迫害し、恨んできたこの世界

それについて真剣に考えているんだろう

「『僕はね、君みたいな子を集めて、とあることを企んでいるんだ』」

「とあること…？」

そして、僕は満面の笑顔で目的を話す

「『君は見下されるのが嫌なんだろ?』」

『なら超能力者を全員抹殺すればいいんだよ』  
『そうすればこの学園都市は平等で平和だ』

『君もそう思わないか?』」

「……おいおい、てめえ、頭イカれてるんじゃないのか?  
超能力者が何人居ると思ってるんだよ? そいつらを全員殺す  
なんて、できるわけねえだろ」

「『勿論一人で出来るとは思っていないよ』 『僕は世界で一番弱  
いんだぜ?』」

『そんなラスボスみたいなこと出来ないよ』 『だから仲間を集める  
んだ』」

しばらく考え込む男の子

うーん、と唸ったりして相当考えているらしい

僕としてはYesと答えて欲しい

彼のような人材は是非とも過負荷側に欲しいものだよ

「俺になんのメリットがある？」

「『メリットって？』」

「お前のその超能力者抹殺計画、それは全部お前の望みなんだろう？  
なら俺への見返りはなんだ？」

「『…僕は過負荷なんだ』 『無論メリットなんか一切無い』」

『ただ僕が出来るのは、一つの保障ぐらいだ』

『僕と居れば、君は世界一不幸かわいそうになれる』

「…ときめくじゃねえか」

僕の条件にニヤリと笑みを浮かべる

「一見デメリットしかないようなこの条件

でも、彼も過負荷ならこの条件の意味を理解しているはずだよ

「分かったぜ。俺はてめえの仲間になってやる。名前はなんだ？」

「『高校三年生の球磨川雪だ』」

「高二の木更津敦だ。一年下だから、アンタの後輩ってことになるな。」

よろしく頼むぜ、球磨川先輩」

「『うん、こちらこそね、木更津ちゃん』」

この世界に来て初めての仲間

『ミスフォーチュン  
負運性』の木更津敦くん

三話 『僕と居れば、君は世界一不幸になれる』（後書き）

まさかの途中まで主人公フルボッコ

まあ、人類最弱なので仕方ないと思いますけど

（オリ、または原作過負荷の説明コーナー）

この作品で新しく登場した過負荷はオリ・原作問わずここで説明します

まずは主人公の過負荷

『オールマイクシヨン大嘘憑き』

”すべて なかったこと現実を虚構にする”能力

それが現実なら、それが起こったという事実を嘘として処理し、無かったことにする能力

所持者が死ぬと自動で発動し、所持者は実質死ねない体

『ブックメーカー却本作り』

作中に能力が使用されるまでお預けです

『ミスフォーチュン負運性』

周囲に居る他人の運を最低レベルまで下げる  
過負荷。その範囲は定かとなつては居ないが、  
近くに居るほど効果が強力になる

漢字の由来は不運の”不”を負に変えて、  
運勢を性つて変えただけです

想像力の無い自分ではこれが限界です…

#### 四話 『無才能だ』

「それで、これからはどうするつもりなんだ球磨川先輩？」

廃工場から出てくる木更津ちゃんはそう僕に訊いてきた

彼とは行動を共にすることにしたんだ、  
まあ初めての仲間だしね

木更津ちゃんはこれから増えていく過負荷の  
副リーダー的な存在になって欲しいからね

僕の思考とかを理解してもらいたい

「『うーん、どうしよっかなあ』僕、ここにはつい最近  
来たから部屋とか学校とかは無いんだよね」

「どうするんだよじゃあ！？ 今日野宿でもしろっていつのか！」

僕の現在の状況を知ると、木更津ちゃんは  
驚きの声を上げ、僕に怒鳴ってきた

「『部屋を見つけられなかったらそうなるね』まあ、君も  
似たようなものだろ？』工場に住み着いてたし』」

「けどなあ、あそこはやっぱり寒くて寝辛いんだよ。  
ま、野宿するんなら俺はかまわねえけど」

工場で寝るのも殆ど野宿じゃないのか？

屋根があるだけマシだけど

「『明日にでも登録するからその時に部屋を貰おうよ』』 ついでに学校も』」

「おいおい、俺はガツコなんか行かねえぞ。そもそも俺たち過負荷にガツコなんて必要なのか？」

ちなみに木更津くんには過負荷については大体説明した

最初はこんなおとぎ話みたいな話は信じなかったけど、本人は自分の能力や思想を考えたら納得したそうだ

これで一人目だね

せめて後三人ぐらい欲しいよ

過負荷勢力は僕を含める主戦力の五人とその他のメンバー多数が良いな

ま、そんな都合良く集まるとは思わないし、精々僕を含めて五人で限界かな？

「『ここは学園都市なんだよ？』』 学校に行かないと怪しまれるかもしれないじゃないか』』 僕はこれでもかなり警戒されているんだよ』」

「警戒？」

「『風紀委員の子を一人螺子伏せちゃった』」

「なにやってんだよアンタは！」

冷たいなあ木更津くんは

「『まあ証拠不十分で多分捕まらないと思うよ？』」

『その子も今は精神科の病院に入院してるから証言なんて

得られないし』」  
「なににより僕に関しての記憶も無かったことにしたから」

「まずは安心さ」

傷を無かったことにしたついでに僕への恐怖以外は  
無かったことにしたから、僕がやったという証拠なんて  
何一つ無い。状況証拠だけで決められそうで怖いけど

「改めて考えると、球磨川先輩はとんでもねえ能力を持つてるんだな」

「『この能力だつて弱点ぐらいあるよ？』」  
「一度無かったことにしたのを無かったことには出来ないし、気をつけないとこの世界そのものを無かったことにしちゃうかもしれないんだ』」  
『ま、つまり僕は自分の中に核爆弾を抱えているんだよ』」

気を抜いて制御が雑になると本気でこの世界が無かったことになるから怖いんだよね

だって、うっかりと世界を消しちゃったら

エリート抹殺もクソもないだろ？

「どんだけ出鱈目な能力なんだよ、その大嘘憑オールフイクションきつてのは…」

「『あはは、よく言われるよ』」

~~~~~

「『…ん？』」

朝の日差しが目に照らされ、僕は起きる

夜は明け、辺りはすっかり早朝だ

小鳥の鳴き声が鳴り響き、学校に登校している
学生達も見える

全員が公園で座ってる僕のことを変な人を見
るような目で見てるけど、なんでかな？

涼しい朝の風が僕の服を通る

まったく、なんとも快適な朝だ

「『おい、木更津ちゃん』『もう朝だぜ？』」

「あア？」

僕の声と共に木更津ちゃんも起きる

彼は機嫌が悪そうだ、顔色も優れないし

朝は苦手なのかな？

低血圧はいけないぜ？

「『明日はさっさと起きて登録しようって
言ったのは木更津ちゃんだぜ？』」

「でも流石に七時起きは久しぶりだ……」

これからは学生なんだから、それぐらいガマンしてくれよ？

ちなみに僕は滑り台で、木更津ちゃんは砂場で寝ていた

僕は寝癖で髪の毛が所々はねてるけど、
木更津くんは砂塗れだ

なんであそこで寝たんだ？

「『木更津ちゃんは馬鹿なんだね』」

「んだとてめえ！」

いけないいけない、つい考えが言葉として出てしまった

僕たちは公園から出て、初春ちゃんがくれた
紙に書かれた住所へ向かった

「その紙、誰からもらったんだ？」

「『風紀委員の子に事情を話して教えてもらったんだ』
『ご親切に住所まで書いてくれたしね』」

「風紀委員について、アンタなにしたんだよ……」

殺人未遂ですけどなにか？

「『着いたよ』」

「早えな！ どんだけ近くにあったんだよ!？」

「『公園の直ぐ近くで助かったね』」

公園の直ぐ近くにあった事務所に僕たちはたどり着いた

二階建ての建物で、小さな会社のような場所だった

こんな所で登録をするんだね

「『木更津ちゃんはここで待ってて』 『直ぐ戻ってくるから』」

そう言って、僕は建物の中へ入っていった

「『木更津ちゃんただいま』」

十分ぐらいしてから僕は戻った

僕はただ名前と年齢を教えただけで、
他の書類とかは全部やってくれるらしい

イメージと全然違うけど、こんなのでいいのかな？

「どうだった？」

「『第七学区で部屋を貰ったよ』 『学校は身体検査システムスキャンを受けた後だつてさ』」

まあ、結果は分かっているけどね

無才能マイナスの僕が超能力プラスのような才能を持っているわけないだろ？

「身体検査つて、俺たち過負荷に検査なんか必要なのか？ 結果なんて確かめなくても分かっているしな」

木更津ちゃんも過負荷というのは段々理解し始めているね

「『ま、学校へ行くためには必要だからさ』 『面倒だけど受けるよ』」

『検査は一応通う予定の学校つてことになってるし』」
転入生つてこともあってあまり良い学校には行けない

第七学区にある学力が比較的低い高校だったと思うよ

僕は一応高校三年生だからそれ相応のクラスになるけど

「『木更津ちゃんはどうするの?』」

「俺は適当に学園都市を彷徨ってるよ。学校にはもう行けねえし、他の過負荷も探しとくよ」

木更津ちゃんは元々学園都市に居た存在

つまり一度は学校に行ってるって意味だ

でも、彼は恐らく高校を中退してるところから、もう学校へ行くのは無理だね?

一度やめると再び学校に入るのはかなり難しいって話だし

「『じゃ、一先ず別れようか』 『じゃあ木更津ちゃん、また後で』」

「ああ、球磨川先輩も精々ボコられねえようにな」

お互い手を振って、僕は学校へ、木更津くんはどこか適当なところへ向かって歩き出した

「やあ、君が球磨川雪くんか?」

「『はい、そうですよ』」

僕が学校にたどり着くと、校門で教師の一人が待っていてくれた

多分あの登録会社から連絡があつたんだね

なにからなにまでお世話になるなあ

「はっはっは、面白い喋り方だな」

「『括弧つけた喋り方ですよ』 他の人はこの喋り方は気持ち悪いって言ってますけど』」

この先生はどうやら僕の括弧つけた喋り方を気に入ったみたいだ

大抵の人は僕が話すだけで怖がるんだけど、この先生はかなり器が広いみたいだ

「俺は独創的だと思うぞ！ ガハハ！」

なんともテンションの高い人だね

「ま、そんなことより、さっさと済ませるか。着いて来い」

先生は僕を学園の中へと案内してくれた

中は至って普通の校舎だった

普通の教室、普通の生徒、普通の先生

全てが普通ノーマル

マイナス過負荷の僕が普通ノーマルの学校に行くなんて、なんとも滑稽で気の毒な話だ

「ここで身体検査を受けてもらう。なーに、この機械に寝てもらうだけだよ」

僕が案内された部屋に置いてあったのは、大きな機械だった

真ん中あたりに一人一人が通れるぐらいの穴があって、台に僕を寝かせた後そこを通らせるらしい

それで超能力の有無、そしてレベルが分かるんだって

超能力者のレベルは強さ

上から5、4、3、2、1、0とあって、レベル5が最も強力なんだ

レベル5はこの学園都市では七人しか存在していないくて、その一人一人が軍隊の歩兵中隊を相手に勝てるらしい

それに比べてレベル0は無能力者

なんの超能力も無く、基本的に

ノーマル
普通な人間のことだ

ま、僕はそれに当て嵌まるんだけどね

「この台に寝転がってくれ」

言われるがままに僕が台に寝転がると、
台が動きだし、僕をあゝ機械の穴へと通した

ゆつくりと通過していく僕の体を、
なにか光のようなものが通る

これだけなんだね

まあ、超能力は脳を調べるだけで分かるらしいからね

「終わったぞ。今結果を検討しているから、少し待っていてくれ」

検査が終わり、僕は再び学ランに着替える

「結果お前は…レベル0、無能力者だ。残念だったな」

ほらね、過負荷に超能力なんか無いんだよ

そんなのを持っている過負荷は、既に過負荷じゃない

超能力者だよ
プラス

「別に超能力なんか欲しくありませんし、
がっかりというわけでも無いですよ」

「ま、本人がそう言うなら俺はなににも言わん。
それより入学おめでとう。もしお前のレベルが高かったら
他の学校に移らせるつもりだったんだが、レベル0なら
ここに通つても大丈夫だろ。じゃ、明日からガンバレよ」

「『へーい』」

今日はもう用済みになった部屋を後にし、
僕は教室の廊下で立ち尽くす

現在時刻は朝の九時

まだ起きてから一時間しか経っていない

はあ、どうしよう？

携帯とか無いから木更津ちゃんには連絡が取れないし

新しい自分の部屋にも戻るのは面倒臭いし

「『うーん…』」

しばらく顎に手を当てながら考える

あ、なら良いこと思いついたよ

他の教室を見学しようよ

そうすれば他の過負荷を見つけられるかもしれないし

そうと決まればレッスンゴー

無駄に高いテンションで僕は学校を歩き出した

「『ん？』」

しばらく教室を転々としてっていると、僕の目に一つの教室が止まった

ここだけが異様の雰囲気を出していた

窓から中を覗いてみるけど、やっぱり中は普通の教室

ツンツン頭の生徒とか、サングラスをかけた生徒とか、関西弁を話す生徒とかも居たけど、それでもまだ普通だね

でも、端から端を除いていると、一人の生徒が僕の目を捉えた

教室の隅に縮こもっている一人の女の子

無表情でなにも考えておらず、他とは別の世界に居るような雰囲気、そして他人を拒絶するような目

でも、そんなことよりも彼女の周りが

僕の興味を引いた

彼女の周りにはなにも無いけど

そう、何も無いんだ

「『彼女、絶対に同類ほくたちじゃないか』」

決めた

僕は彼女の最低を

底辺を

負完全を

負け犬らしさを

「『受け入れてあげようじゃないか』」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1468y/>

とある転生者の過負荷（マイナス）

2011年11月7日11時09分発行